

琉球大学学術リポジトリ

日本人健常者における曖昧さへの態度について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2017-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 榎木, 宏之, Enoki, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36925

(別紙様式第3号)

論 文 要 旨

論 文 題 目

Attitudes Towards Ambiguity in Japanese Healthy Volunteers

(日本人健常者における曖昧さへの態度について)

氏 名 榎本 知之 印

本研究では、うつ病をはじめとする精神疾患や発達障害において問題となり得る情報処理機構の柔軟性に関与する「曖昧さへの態度」に着目し、その認知・心理特性を解明するための比較対照群である健常者の曖昧さへの態度の心理構造を明らかにする。曖昧さへの態度は、曖昧な刺激の処理において生じる、認知的・情緒的反応パターンであり、不適切な処理は不適応をもたらすため、認知一症候の連関が一貫性をもって明確に特定できれば、より精緻な精神医学的診断や有効な心理療法的介入の選択につながるものと思われる。

そこで我々は、曖昧さへの態度尺度 (Attitudes Towards Ambiguity Scale : ATAS; 西村, 2007) について因子分析を行い、結果の妥当性を検証するため、近接する構成概念の「心理的柔軟性」を評価する心理学的尺度である日本語版 Acceptance and Action Questionnaire (AAQ; 松本・大河内, 2012) を用いて両尺度の関係を検討した。対象者

1019名の日本人健常者（女性513名、男性506名、年齢18～78歳）に両尺度を含む質問紙調査を実施した。

探索的因子分析によって、先行研究（西村，2007）の5因子構造とは異なる4因子構造が抽出された（Enjoyment; $\alpha = .83$, Anxiety; $\alpha = .75$, Exclusion; $\alpha = .75$, and Noninterference; $\alpha = .65$ ）。確認的因子分析による適合度の比較では、5因子構造とほぼ同程度の適合度が示された。本研究は大規模、かつ、幅広い年齢層を対象としたサンプルから抽出された結果であることから、最終的に、曖昧さへの態度は4因子構造となることが採用されたが、先行研究の因子構成との間で重複性も認められた。AAQとの関連においては、ATASの下位尺度であるAnxiety因子はAAQのWillingness因子と負の相関を示した（ $r = -.39$, $p < .001$ ）。一方で、ATASの下位尺度のEnjoyment因子は、AAQの下位尺度Action因子との間で正の相関（ $r = .40$, $p < .001$ ）

が認められた。

結論として以下の心理構造が示された。曖昧さを楽しむことが、同時に曖昧さを排除することと関連する結果は、曖昧さを排除して明瞭で分かりやすいものにしていく過程を好むために、曖昧な状況を挑戦的な課題として与えられることが楽しいと捉える傾向を示している。また、曖昧さを楽しむことが曖昧さに関与しない態度と結びついている結果については、曖昧さを楽しめる個人は、曖昧さに対して充分耐えられるため、曖昧さに関与しない態度をとることが考えられる。一方で、曖昧さに対して不安が喚起される個人は、曖昧さに対して非寛容であることから、感情レベルや現実の環境の中で低い受容となることが考えられる。更に、4因子モデルによって、曖昧さへの態度は、認知的要素（Enjoyment, Anxiety）と行動的要素（Exclusion, Noninterference）に分類できるという解釈の可能性も示唆された。